

女性科学者の地位向上に向けて

Towards Advancement of the Status of Women Scientists

島 美喜子 Mikiko SHIMA

平成11年の男女共同参画基本法の成立以来、女性の社会的役割を重視するさまざまな動向とともに女性科学の地位にも著しい向上が見られるようになった。だが、古い時代を過ごしてきた者としては、現在の状況に到るまではやはり、長い過程であったと思う。

1975年、国際婦人年に際して、日本学術会議では「女性研究者の地位向上に関する要望書」を内閣総理大臣に提出したが、当時、日本婦人科学者の会の幹事を務めていた私は、猿橋勝子さんとともにその作成にかかわった。米国ではすでにこの頃、Affirmative Actionの一つとして、大学や企業で働く女性の人数を一定の比率まで増やすことが義務づけられることになった。

私は旧制度の最後の学生で、東京女子高等師範学校（現、お茶の水女子大学）、東京文理科大学（現、筑波大学）および同大学院に学び、大学院修了後は同大学理学部助手になった。日本の高分子学会が創立されて未だ間もない頃であったが、私は小寺明教授の研究室で高分子物理化学を専門とし、とくに高分子の基礎物性の研究に携わるようになった。その頃の最初の論文は「共重合体の分子構造と双極子モーメントに関する研究」で、米国のJ. Polymer Scienceに掲載された。助手在職中、1961～63年にニューヨーク州立大学・高分子研究所に留学、Michael Szwarc教授のもとで研究員として2年間を過ごした。リビングポリマーの研究で有名なSzwarc教授のもとには世界各国から多数の博士研究員が集まり、最も活発に研究が行われていた時期であった。ここでの2年間、私はリビングアニオン重合の反応機構についての研究を行った。

いま思えば、大学理学部で女性の助手は1人、化学科学生の時も1学年から3学年まで合わせて女子学生は2人、米国留学時代も研究所に女性研究者は私1人というのが当時の状況であった。

米国から帰国後、間もなく東京女子大学に赴任、引き続き高分子科学の研究と学生の教育に携わって30余

年を過ごすことになった。この間、1981年から1982年にかけて半年程、ロンドン大学・Imperial Collegeに客員教授として2度目の海外留学生生活を過ごす機会を得たが、この時には大学の状況も1960年代とはかなり変わっていた。高分子物性の研究室にも2人の女性教員がいたが、その1人がDr. Julia Higginsであった。彼女はやがて教授となり、後にRoyal SocietyのVice Presidentの要職に就くことになった。来日の機会や海外の国際会議などで会うことが多かったが、3年ほど前、大学を定年退職したという知らせを受けた。

近年は科学に関する政府の審議会や委員会等で活躍する女性科学者も増えているが、私が以前から気にかけていることは、女性科学者は依然として少数であるということである。これに関連して、私は図らずも女性科学者に対する二つの賞の創設当初から長い間、その選考にかかわることになった。一つはすでに有名になっている猿橋賞で、毎年、50才未満の優れた女性科学者1名に賞（副賞30万円）を贈っている。第1回は後に文化功労賞も受賞された遺伝学の太田朋子博士に贈られたが、その後、物理学会会長になった米沢富美子さん、地震学の石田瑞穂さん、昨年、国際科学会議副会長に就任した黒田伶子さんらも受賞されている。この賞は今年、30周年を迎えることになる。もう一つは（社）大学婦人協会に1998年創設された守田科学研究奨励賞で、40才未満の若い女性科学者を対象に毎年2名に賞（副賞50万円）を贈っている。これらの賞の贈呈に際していつも感銘深く思うのは、きわめて優秀な若い女性科学者が目覚ましく育っていることである。また、とくに若い世代では研究と育児を両立させている人達も多く、時代の流れを感じさせるものがある。これらの受賞者によって、魅力ある優秀な女性科学者の存在を社会一般の人々に知らせるとともに、とくに若い女性がより多く、自然科学への道に進むように励ますものとなることに大きな意義があると考えている。



島 美喜子 Mikiko SHIMA

東京女子大学名誉教授、理学博士
東京文理科大学（現、筑波大学）化学科卒業、
同大学院修了
専門は高分子物理化学
E-mail: miki.shima@nifty.com